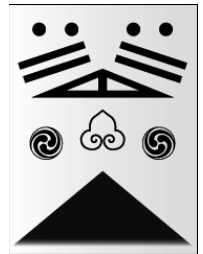


古代舞楽「造面」の秘密

土師氏が刻んだ関西西国土開発地図

清水守民



■関西五芒星結界文明と文化史蹟

古墳時代、大和盆地の豪族たちには何か「共和的」な関係があったのではないか、との見解が多くの歴史家より指摘されています。そのひとつの説明仮説としてあげたいのが、私が度々紹介しています「五芒星結界」仮説です。ここには結界による「棲み分け」や「縄張り」のルールがあつて、これがお互いに不利益となる戦乱などを防ぎ、豊かな社会を築いていたとするものです。

さてここでこの「関西五芒星結界」発掘に至ったいきさつをお話しします。図Iの右下「大和環」をご覧ください。A法隆寺下に眠る五芒星遺跡の中軸線を南下させるとB百濟寺に突き当たり、更に南下させるとC益田岩船に到達します。そしてこれがA B B Cでした。それから大和盆地がほぼ円形の山周である特徴より、五芒星A D E F G Aを設定しこれを十個、輪のようにつなげると「十連五芒星環」(大和環)が出来上がります。

次に西側に十連五芒星環の角と角がくっつくように河内環をつくりましたが、これがなんと②箸墓の設計思想と一致。同じ要領で旗立山中心に七十二度ずつの回転で摂津環・交野環・寧楽環の結界環が得られます。

で、図では大和・河内・摂津・山城地域の主要な史的遺産がこの五芒星図形のクロスポイント※や結合ポイントに乗ってくることを確認しました。(仮説検証)
※五芒星図形の交点や結点に重要な意味があることで「ペンタクロス」と造語。星二つの結合形が「ダブルペンタ」。

この大結界網は生駒山中心に「五弁の梅花」形が設定されることで、これを「梅鉢ペンタ」と名付けました。

この梅鉢ペンタには沢山の文化史蹟がありますが、その多くがこの結界文明と関わっており、「造面」の謎を解く前にその一部を紹介しておきます。

①相撲です。土俵の俵は二十個で五芒星を四つ重ねてレイアウトでき、これが大和環の史蹟と一致します。東・野見宿祢が西・当麻蹶速に勝って当麻の地を奪いますが、これは代理勝負による抗争解決法。先述した結界ルールでの平和的解決を図る知恵だったのでしょう。

この出雲族・野見宿祢を祖に持つのが土師氏で、彼らは土木建築に長けたいわば日本のフリーメイソン。以後この梅鉢紋を背負った子孫たちが歴史に躍動します。

②箸墓はその巻向で古墳時代黎明期に築造された五芒星設計の傑作で、箸墓は「土師墓」ではないかという説が有力です。これが先述の大和河内環同期との関係で、大結界網は箸墓以後に設定されたと推理できます。

③仁徳陵が河内環西側五芒星のど真ん中筋に存在感を示しています。で、その五芒星結界線に沿って中世都市堺の環濠が築かれるという時代を超えての文化継承が見て取れます。その仁徳陵の真東が応神陵で、この百舌鳥古墳群・古市古墳群(世界遺産)には土師氏の活躍を刻む土師町・土師里の工人集落名が現存します。

④仲姫陵は古市古墳群の先鞭を切る典型的な中期型前方後円墳で、ダブルペンタの角や交点を結ぶだけで

段築や稜線設計が完結します。この簡便な設計方法は以後、五世紀における中期前方後円墳の爆発的な全国規模・大量築造に寄与しました。なおこれは次の法隆寺の下に潜むダブルペンタ構造と通底します。

⑤法隆寺はダブルペンタ構造遺跡を覆い隠すように建てられた寺院で、物部秘宝伝説を残す三伏蔵と鯛石との配置関係により元の姿が推定できます。これが五芒星結界発見のきっかけとなりました。経蔵伏蔵を頂点とする中軸線が南東十八度の南下で百濟寺や益田岩船に至るといふ展開です。で、斑鳩寺や斑鳩里もこの軸線に沿って造られているのですが、法隆寺は南東九度の傾き築造で絶妙の「元姿の隠蔽」を図っています。

⑥大藤原京(新益京)は十条十坊という本邦初の本格的な中国式正方都城ですが、その京城設定にはなんと基本五芒星(図左下参照)の一骨・一五〇〇〇尺が使われていました。実は先述した斑鳩里にも区画制が施されており、一区画三〇〇尺(約一〇七メートル)だったので、ここ藤原京は一区画三七五尺(約一三三メートル)になっています。これは基本五芒星一骨の四〇分の一に当たり、どうも前時代のスケールを中国式都城十条十坊制の割付けに合わせて都合よく変更した形跡がうかがわれます。

大藤原京の後の主だった大規模京で平城京―長岡京―平安京と造られますが、これらはいずれも藤原京を手本としており、また前時代の梅鉢結界環に従ってのレイアウトになっています。

以上、おそらく土師氏がもたらした五芒星形文明が、時代を超えた潜在文化として後世に継承されている様子がわずかながらおわかりいただけかと思えます。

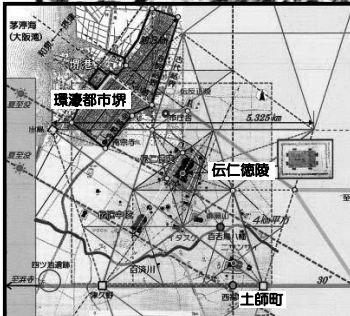
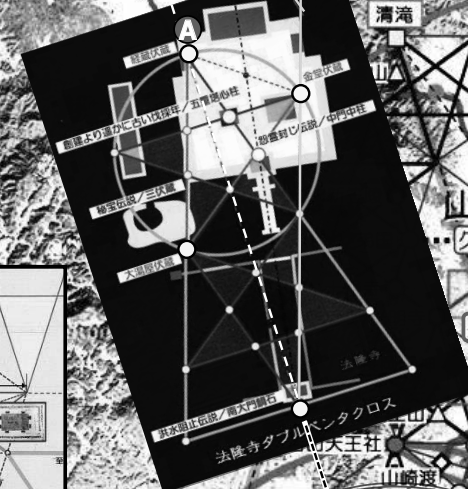
この土師氏の大活躍、これを直接記す史料はないのですが、実は宮廷舞楽「造面の舞」の中に見事に残されていました。

I. 関西五芒星結界文明と文化史蹟 梅鉢紋上に咲いた出雲・天神族(土師氏)のペンタクロス文化

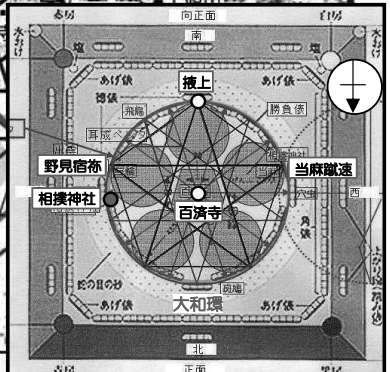


旗立山

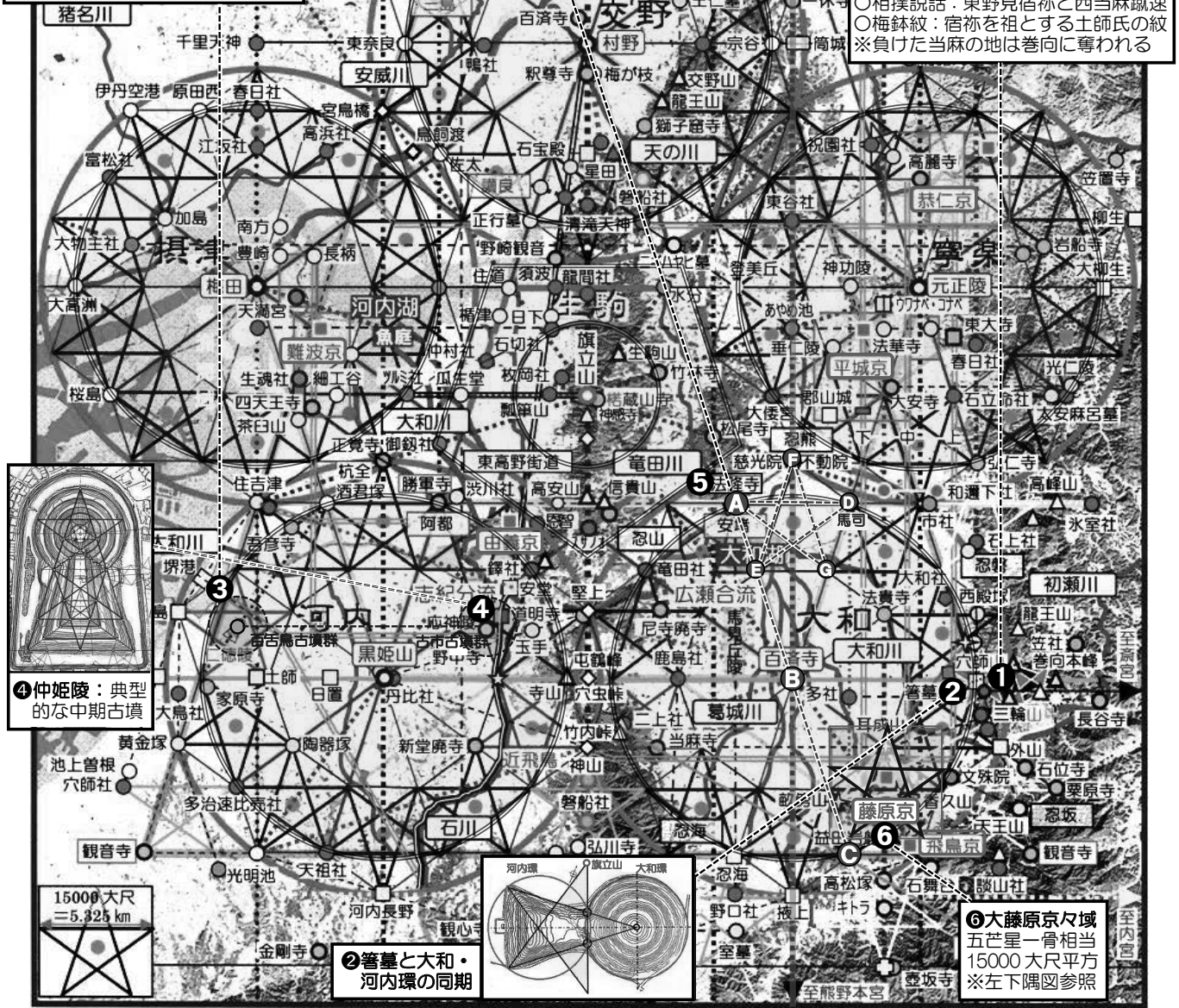
⑤法隆寺：三伏蔵○鯛石を結ぶダブルペンタクロス構造



③仁徳五芒星と環濠都市界の区割
○五芒星結界線に沿った都市計画



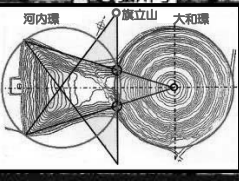
①相撲神社：土俵構造と大和環構造
○相撲説話：東野見宿禰と西当麻蹴速
○梅鉢紋：宿禰を祖とする土師氏の紋
※負けた当麻の地は巻向に奪われる



④仲姫陵：典型的な中期古墳



②箸墓と大和・河内環の同期



⑥大藤原京々域
五芒星一骨相当
15000大尺平方
※左下隅図参照



■宮廷舞樂「造面」と国造地図

数々の文化史産を生み出す原動力となったのが、五芒星図形を駆使して土木・建築分野で大活躍した土師氏でした。彼らは大王級の豪族や朝廷の下で国土開発事業を推進。で、実はその成果を誇示するかのようない「ある事象」が宮廷舞樂の中に潜んでいました。

古典舞樂は平安時代の貴族により各地方・各民族の舞文化を集大成したものとされていますが、その中でも「蘇利古」や「安摩」に用いられる道具で不思議なお面があります。「雑面（造面・蔵面）」と称されるもので、右冒頭にその代表的なものと下掲の写真にそのお面をつけての神宮神樂（伊勢神宮・内宮）での蘇利古の舞を掲げておきます。

面には多種のデザインが見られますが、その変化具合を下写真のような現行面と照らし合わせて考察すると、一番上のデザインが最も初源性に近いかと思われます。



さてこの面、なにやら人の顔のようなのですが、それが何を意味しているのかサッパリ解りませんでした。そんな中、多分目玉に相当すると思われる左巴紋・右巴紋がひよっとして大和・河内環の広瀬（河合）合流地点と渋川（志紀）分流地点あたるのではないかと思ひ、梅鉢結界マップの真ん中に嵌め込んでみたのがこの造面シミュレーションマップです。これが想像を絶する展開をみるようになりました。

先ずは「目玉」の謎、図中左上の雑面図と『古事記』「三貴子誕生」文をご照合ください。左目の左巻き巴紋は天照大御神に相当し、右目の右巻き巴紋は月読命に、鼻は建速須佐之男命に相当します。そして確かに大和環の大和川は竜田に向って左回りに流れ、河内環の大和川は河内湖に向って右回りに流れます。これはまさに「神話面」、梅鉢ペンタの中枢構造を天皇家の中枢神話になぞらえての「寿ぎ舞」だったのかも知れません。更に頭部の四点は結界のクロスポイントにあたり、額部の斜線筋は旗立山を中心にペンタクロスラインに従い、口部の三角形は堅上を頂点としたペンタライン三角形を構成しています。おまけに鼻部の頂上付近には三郷・素戔嗚神社が鎮座するという摩訶不思議な展開、本当に驚くことばかりです。

またあの持統天皇が盛んに広瀬大忌神や竜田風神を祭らせたのは、この設定に基づく信仰だったのでしょうか。その他、河内の旧大和川流域には月読命に関わる信仰が残っており、まだまだ調べ尽せない「課題」です。

さてこの驚異の面を被つての舞とその舞手は、いかなる背景を背負つて何を主張していたのでしょうか。ここで造面舞樂の「面以外での要素」からこれを探ってみましょう。

先ずは衣装の意匠から。衣装にあしらわれた紋は現行、上掲写真のような「五分割木瓜紋」を使っています。この木瓜紋は素戔嗚系で祇園社などに使われていますが、実は江戸時代まではこれらの神社は牛頭天王を祀つており、明治になって素戔嗚に切り替えたそうです。で、図の挿絵をご覧ください。衣装紋が判然としないのですが「五瓜梅鉢紋」の可能性もあり、いずれにしても五弁花で梅鉢紋と共通する構造になっており、紋使用の変遷も考慮して見なければなりません。

それから袖にあしらわれた菱形デザインですが、これは五芒星結界に現れる領域標示ではないでしょうか。注目したいのは蘇利古が持つ「ずばい」です。元々は

「すわえ」「楚・楳」で直伸する枝を指すものですが、梅鉢ペンタの中心・旗立山に隣接した寺院が楳蔵山寺で「すわえ蔵」。旗立山から結界線を張り巡らす名前にピッタリです。で、蘇利古はこれを持ちながらなにやら幾何学的な動作で舞うという、まるで梅鉢ペンタ造成を推進した土師氏の所業を顕彰するかのような舞っぷり。これは「土師舞」と言つていいのかも知れません。

それからその舞式ですが、蘇利古は五（四）人立で何か「五芒星形」を連想させます。また安摩は二人立ですが、「お互いを見ずに、円周上を完全に中心点対称に移動する」というもので、舞樂の中でも最高の秘技なのだそうです。「陰陽のバランスで世界が成り立っている」という太極（タオ）思想の表現ではないでしょうか。

「ゾウ面」には雑・造・蔵と三種の漢字が当てられますが、分析からは「造面」が最もふさわしく思えます。

以上いささか前ノメリ気味の造面論になりましたが思い切つて呈示します。ご査考・ご意見を仰ぎます。

実はこの造面は以前から知見していたのですが、今年の発表で見直す際に改めて確認できたのが、生駒山の南西にあり円墳のような人工臭のする旗立山山頂のテーブル&ベンチ（グーグル航空写真）。見事な五弁芯型です。どなたかこの設計者を知りませんか？

それから新知見として箸墓の設計思想と旗立山を含む大和河内環構造の一致、更に対面の岩屋文殊の発見。鎌倉末期〜南北朝時代に活躍した楠木正成は岩屋文殊で知略を授かり、旗立山を情報拠点に使っていたそうです。古代の知恵が脈々と息づいていました。

（東大阪文化財を学ぶ会）

Ⅱ. 宮廷舞樂面「造面」と国造地図

蘇利古・安摩、土師氏の業績を刻んだ国土開発図面の舞

